

# 平和憲法だけで国は守れる

——父子苦難の百年

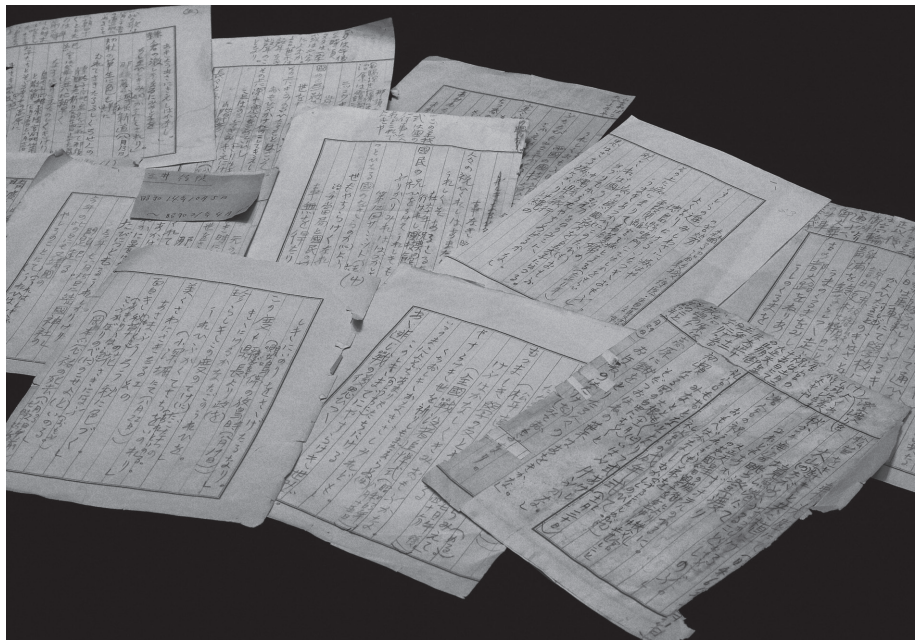
岡井敏著

目次	
第一部	
第一章	昭和天皇の真筆 5
第二章	父の「国家は中心より滅ぶ」 17
第三章	「二つの文化」道理主義 94
第四章	前大戦の反省——道理に徹する平和論 112
第五章	防衛論と憲法問題(一)九条解釈の破綻 121
第六章	防衛論と憲法問題(二)平和的防衛論の建設 147
第二部	
第一章	戦争について考えたこと、実行したこと 168
第二章	ハイドパーク覚書「原爆は日本人に使う」 201
第三章	原爆と戦争に関するメモ二、三 221
第四章	被団協に対する疑問 230
第五章	核廃絶は国際法で 242
補章	ニュートンのプリンキピア 256
あとがき	266

二〇一九年年頭発表の昭和天皇真筆には驚くほどの誤字珍字。

百年前、著者の父は「国は中心から滅ぶ」と天皇の再教育に奔走、失敗。志を継ぐ子は「平和憲法で日本を守る」を実行可能な道理であると語る。

脚注 表紙写真は、「横浜大空襲下、ハダシで避難する子どもたち」（一九四五年五月。毎日新聞提供）



木

不枯の庭の木のまに冬、櫻(の)  
 はま(心)詩にけるを、しくそ、  
 みおをせは白くなりたるわが庭に  
 ンガバネのギしにゆきほふせけり  
 枯残るくぬフの木の間に梅の花化  
 にほひかすみてはるらんほまを  
 風強まに絶つある松の木は(前)  
 みどりひとしほ美しきかま  
 (ひま) みるる) 食にたえつ、松の木は  
 オゼギの出石をかえりかま  
 春ふけて須流の林の木の間に

取後 國燃 車  
 國燃豆の黒塗の道 伊直人まで  
 する車、しのびくる夫のりけり  
 國燃豆の治車の車にかりけり  
 なることしのびやふみのはるた  
 筑此系なる民燃豆の汽車のみ車  
 のりこちよしせつぎしりた  
 熱海さし小田原よりはるひく  
 くるまにのりて垂雪の中かく  
 説明(熱海さしを其の上に或は  
 深く(六字まれと)としをオ  
 上や、又垂雪の中、ゆくを

昭和天皇の真筆 (2019年1月1日公表、毎日新聞提供)

## 第一部 第一章 昭和天皇の真筆

### 誤字珍字の昭和天皇の真筆原稿

平成の年号が今年最後という年、二〇一九年（平成三十一年）の一月一日、朝日新聞の第一面に「昭和天皇直筆の和歌の原稿が見つかった」と大きく報じられた。その昭和天皇の原稿というのは、保管していた人が匿名を条件に出したもので、朝日新聞にとつては大きなスクープであろう。だから一月一日の第一面を飾ることになって、同日の別の紙面には原稿の詳しい説明記事が載せられた。その上さらに一月三日には、昭和天皇の原稿には天皇の心境を映すメモがあるとして、これも大きく報じられた。何れの記事にも原稿の写真が載せられたのだが、以上すべてを総合して異常なほど目を引いたのは、記事自体というより、昭和天皇真筆の写真だった。というのは、天皇真筆はこれまで見たことが無いような乱雑な粗末な字だったからである。私は最初それを見た時、これが天皇の字かと、ただ驚くだけだったが、直ぐにそれをぼんやり眺めているだけでは済まされないような気分になった。昭和天皇の字を一字一字ちゃんと見る必要があると思つたのである。

写真は原稿野紙の大きさに比べて余りにも小さかったから、きちんと見るためには場合によっては虫眼鏡の力を借りなければならなかったが、そんなことをするまでもなく言えること

は、いくつもあつた。まず、先ほど述べた字の書きようだが、それはまったく投げやりに書いた  
としか思えないものだつた。大きさは不揃い、教室でノートをとるような字ではない。字のうま  
いまいまいというより、書き散らしただらしない字——成績が中以下の生徒に見られる筆跡なので  
ある。事実、数枚の原稿罫紙の中に、誤字が非常に多かつた。具体的にあげると、御用邸の「あ  
ずまや」だろうか、「嚶鳴亭<sup>おうめいてい</sup>」というのが出て来るのだが、これが「嚶鳴亭」となつており、「儀  
式」は「義式」となつていた。昭和天皇には亭と停の区別、義と儀の区別が出来なかつたのだら  
うか。「一月寒中寒期きびしく」は「一月寒中寒気きびしく」でなければならぬ。「旧歴」はも  
ちろん「旧曆」だ。続いて言うと、「氣候」が「気候」となつてゐる。

以上は普通よくある間違いだが、それに混じつて、大した間違いではないけれども気になる、  
というものも色々あつた。二・二六事件を「二二六事けん」と書く。これはどうかと思われる。  
普通の教育を受けた人間なら「事けん」などという書き方はしない。この書き方——子供が書い  
たとも思えるこの書き方が、「珍づしき」と書くことに繋がつてゐるのだろう。「珍しき」にどう  
して「づ」を入れたのか。彼には、語幹と語尾ということが分かつていないのか。昭和天皇は書  
くという作業で、自然に知的な心構えになることなんかなく、注意を払うこともなく、頭も縮ま  
らないままペンを走らせていたのだろう。「昨未明」を最初、「作未明」と書いて訂正していたり、  
「散步」の「散」の字の「つくり」に、縦棒を引いた跡があつたりするのは、その現れだ。彼の  
「寒期」の「期」の字は、偏の「其」の横棒が二本はみ出ているが、これは筆の勢いというより

同じ長さ出ているから、はみ出して書くのが、習慣になっていたものと思われる。他方、「飛行」の「飛」の字二個。一つには点が二つ足りず、その傍のもう一つの「飛」は、別の罫紙に半ば隠されているのはつきりとは分らないが、これにはどうやら点の数は正しく四つあるようなもの、こっちの「飛」の「升」の箇所には縦棒二本だけが強く書かれているから、まるでこの字を消したようになっていいる。要する昭和天皇にとつては、字なんか書けば良いので、それ以上はどうでもいいのだろう。字は、意志を正確に伝えるのに大切な手段であるのだが。

そして昭和天皇にとつて決定的なのは、原稿には二セの字が書かれていたことである。「ああ悲し」の「悲」は、非に心だが、昭和天皇の原稿には非に「しんにゅう」が書いてある。私はこんな好い加減な字を書く人を見たことがないが、こういう種類の誤字は他にもまだあった。心覚えのメモとして、昭和天皇は多分「世界の大勢をよむこと」と書いたつもりだっただろうが、「勢」のところには、「勢」の右側の「丸」を取って下の「力」を持って来た珍字が書いてある。

昭和天皇にこれだけ誤字珍字が多いというのはどういう事か。彼の国語の学力が標準以下であるのは間違いないが、それだけの問題だろうか。人は学習で、通常間違いを正しながら徐々に覚えていくのだが、彼にはその根気が足りないということだろうか。あるいは覚える力が弱くて、直ぐ忘れるということか。しかしそれでも人は何とか覚えて、あれほどの間違いを出さないので普通だから、昭和天皇には間違いが全く気にならないのであろう。とするとこれは困る。それは性格の問題であって、それがよる物事の処理に現れて来るからだ。

昭和天皇の真筆から見えて来る昭和天皇の性格は残念ながら良くない。「投げやり」と「ごまかし」である。天皇はあれだけ沢山の誤字を作る。それが余りにも多く、度々出て来るから、天皇が誤字というものに気が付かないはずはない。しかし彼はそれを直そうとしない。放りつ放しにしておく。投げやりなのである。その上、天皇は余り世間に例のないような珍字を書く。気分に応じてそれを書いて済ましているらしい。ごまかしているのである。天皇は最晩年になっても「悲しい」と書こうとして、「悲」の字を「非」まで書きかけて、「非」の字の下に「心」があったのを思い出せず、何となく形の似た「しんにゅう」を書いてごまかす。普通なら直ぐ字引を引くところ、天皇はその何でもない労を惜しむのである。天皇の教育係など、注意しなかったのだろうか。しかしそれが本当に困る事になるのは、これが天皇のことだからである。天皇のこの性格が政治に現れ、日本の運命に関わって来るのである。

#### アラヒトガミは、誤字珍字を書く普通の人

こうして昭和天皇の真筆原稿は、昭和天皇のペールを剥がすものになった。昔、学校に奉安殿というのがあって天皇皇后の写真が収められていた。その写真は御真影と言ひ、祝祭日式典には学校長が式服で奉安殿から取り出し、講堂の壇上に掲げる。と言つても写真がただ置かれていたのではなく、写真は幕で覆われていて、生徒が全員最敬礼をしている間に校長が幕を開ける。生徒はどんなふうにして「天皇皇后両陛下の御真影」が現れたのか分からないが、それこそ



が現人神アラヒトガミだったのである。しかし今初めて分かった。アラヒトガミは、誤字珍字を書く普通の人だったのだ。もちろん戦後、アラヒトガミなどという言葉は消えて、私自身も忘れていたが、これほど、天皇がどこにでもいる普通の人だとは思わなかったから、アラヒトガミを思い出して感慨おぼしめ入いり込んだのである。そしてまた昭和の歴史を振り返らざるを得なかった。

昭和天皇が普通の人の能力を持って天皇となったことは、もちろん昭和天皇の責任ではない。しかし、天皇の地位の重大さを自覚しないで、普通の人として、天皇の役目を果たさずに、君臨することだけを使命として過ごしていったなら、これは実は大変な問題なのである。

昭和天皇には一つだけ回想録がある。それは昭和天皇没後の一九九〇年（平成二年）に発見され、発表された『昭和天皇独白録』だが、発表当時、私は次の一文を読んで非常に違和感を覚えたのを記憶している。

「昭和十六年（一九四一年）十二月一日に、閣僚と統帥部との合同の御前会議が開かれ、戦争に決定した。その時は反対しても無駄だと思ったから、一言も言わなかった」

これは書かれている通り、前大戦に入るか否かを決める国家最高の重要会議のことで、そこでの天皇の賛否が国の運命を定め、歴史を決定する。これに天皇ただ一人が決定権を持っていたのである。当時の日本、大日本帝国は、天皇によつて統治され、天皇の意向がすべてを決めた。「大日本帝国は万世一系の天皇これを統治し」であり、宣戦布告も終戦も天皇が決める。憲法には「天皇は戦いを宣し和を議す」との条文がある。もちろん実際の問題処理を行うのは大臣で、責任を

とるのも大臣である。大臣の責任条項として、大日本帝国憲法には「国務各大臣は天皇を輔弼ほむ（註、補佐）しその責に任ず（註、責任をとる）」があり、重要書類は「国務大臣の副署を要す」である。しかし大臣が署名してもそれは一過程に過ぎないのであって、天皇が承認しなければ、戦争も絶対始められない。これが根本原則なのである。

そういう天皇が、国の運命を問う問題で「無駄だと思ったから、一言も言わなかった」のだから、昭和の歴史に昭和天皇の人間自身がいかに重大な影響をもたらしたことが、それは明らかであろう。そして今回の昭和天皇の真筆というのは、この問題の重さを分からせるものとなったと思う。ただ話題にしたり、目くじらを立てているだけでは済まされない問題なのだ。こうして私は、年号の変わる平成三十一年（二〇一九年）に、日本史における昭和天皇の役割を、天皇の資質の面を含んで改めて考えてみる気になったのである。

### 昭和天皇に真正面から向き合わない識者

天皇真筆の問題それ自身に戻ってみると――世の識者は私の考えたような事はちつとも思わないらしく、私との違いが浮び上がって来る。今回の記事には、昭和天皇の歌を研究する所功・京都産業大学名誉教授、ノンフィクション作家・保阪正康氏、作家・半藤一利氏の三氏がコメントを寄せたが、皆、批判的な事は言わないように気を配りながら、天皇をいたわるように遠慮気味に語っていた。所氏は、昭和天皇の「国民の祝ひをうけてうれしきもふりかえりみればはづかし

きかな」を取り上げて、「胸に迫る」と次のように言う。

「在位六十年の『はづかしき』という一首からは、自らの役割を自問自答しておられることが推察される。立憲君主として自らの言動を律した昭和天皇は、戦後、その抑制的な態度が『戦争を止められなかった』と批判されることになる。還暦、古稀の歌と合わせて考えると、国民のために務めを果たしてきたのか、生涯にわたり深い内省の中にあつたことが伝わってきて胸に迫る」保阪氏は、昭和天皇の「一月寒中寒<sup>マ</sup>期<sup>マ</sup>きびしく、立春なれど寒さきびしく雪をみて二二六事件<sup>マ</sup>を思ふ」を取り上げた。

「昭和天皇にとつて二・二六事件は先の大戦の次に心を痛めた出来事で、戦争を機にゴルフを止めたことは知られているが、スキーにその気持が及んでいたなら、日常の風景にまでつらい思いが入り込んでいたのだと思う」

保阪氏は当たり障り無いことを取り上げて昭和天皇に対するいたわりの気持を表現したのだが、念のために言うが、年配の人間の多くは、昭和天皇在位の期間中ぐらいの間は、二月に大雪が降ると必ず二・二六事件を口にしていたと言っている。そのくらい二月の大雪と二・二六事件とは、昭和天皇だけでなく、昭和初期を生きた多くの人の心の中で結びついていたのである。

半藤一利氏も、所氏が引用したのと同じ歌について語った。戦時中に勤労働員で働かされたという半藤氏は、「昭和天皇には大元帥陛下としての戦争責任があると考えていた」のに、昭和天皇在位六十年式典で、「昭和天皇のほおを涙がつたい、先の戦争による犠牲を思うとき『なお胸

が痛み、改めて平和の尊さを痛感します」と語った」ことなどを合わせて考えると、「昭和天皇が晩年まで抱えていた尽きせぬ悲しみが伝わる」と語る。

しかしその後の半藤氏の語る口調は一転して、昭和天皇に対して批判の色を帯びたものになっている。

「注目したのは日米安保条約改定を実現した岸信介首相（当時）の死去に際し詠んだ歌だ。

『その上にきみのいひたることばこそおもひふかけれのこしてきえしは』

天皇自身の注釈として『言葉は声なき声のことなり』とある。安保改定が国論を二分し、国会がデモ隊に包囲される状況の中で岸首相が語った『いま屈したら日本は非常な危機に陥る。私は“声なき声”にも耳を傾けなければならぬ』を思い起こさせる。デモ参加者の声ばかりが国民の声ではない、という意味だ。昭和天皇が記した“声なき声”という注釈と歌を合わせると、昭和天皇は、岸首相の考えを『おもひふかけれ』と評価し、深く思いを寄せていたのかと複雑な気持ちにとらわれる」

半藤氏はさらに言う。

「昭和天皇は近代の天皇の中で唯一、少年時代から軍人として育てられ、十一歳で陸海軍少尉となった。……終戦後には、米軍による沖縄の占領を長時間継続するよう、側近を通じて米側に伝えていたことも明らかになっており、側近にも日本は軍備を持って大丈夫だとの考えを漏らしていた。あるいは日本の集団的自衛を定めた安保改定に賛成の気持ちをもっておられたのだろう

か。それをうかがわせるような直筆の言葉が残されていることに心から驚いている。生涯、大元帥としての自分がなかなかぬけなかったのか」

これは、内容としては昭和天皇批判である。しかしそれを「複雑な気持ちにとられる」とか、昭和天皇が「大元帥としての自分がなかなかぬけなかった」とか、遠慮気味にしか言うことができない。人は昭和天皇を語るとき、まだ遠慮気味にしか語らないのである。ということは、世は学問的に昭和史を語る事が、まだ出来ていないということではないか。戦争の反省が本当には出来ていないということではないか。あの戦争にどうして入り、どうして抜け出せなかったかが、本当には分かっているのではないかと私は思う。

私は、昭和天皇在位六十年式典での天皇の頬をつたった涙と、昭和天皇が、「声なき声」にも耳を傾けなければならぬとする岸信介を称えることとは矛盾すると思う。涙が戦没者に対するものなら、天皇は自らの宣戦布告を心の底から深く後悔しているはずである。戦没者に申し訳ないと思っっているはずである。一方岸信介の「声なき声」に耳を傾ける」とは、彼の生涯に亘って持ち続けた信念を語るものであろう。その信念をもって彼は東条内閣の国務大臣として宣戦布告の詔書に署名をした。最後に天皇が署名をして宣戦布告となったのだから、岸は天皇を戦争へと導いたのである。つまり岸信介は、天皇を後悔させた不忠の大臣だったということではないか。となると、天皇の涙とは一体何だったのか。この二つは矛盾するではないか。わが国の昭和史は、こういう矛盾をそのままにして成り立っている。これは大きな困った問題である。ではこういう

状態をどう変えていけばいいのか。

所氏、保阪氏、半藤氏のように語る人は非常に多いに違いない。そもそも天皇統治の時代は皆そうだった。天皇をひたすら崇め奉る。こうして戦争に入り、こうして国を滅ぼした。われわれは、そういう経験を経たにもかかわらず、昭和天皇真筆の問題でも分かるように、今も国の空気は、本質的には昔のままである。

ある意味では所氏と半藤氏とでは昭和天皇を一見全く逆のように捉えているところがある。所氏は根拠を挙げずに昭和天皇を「抑制的」とし、半藤氏は根拠を挙げて昭和天皇を「生涯、大元帥としての自分がなかなかぬけなかった」とする。しかしながら、昭和天皇が「国民のために務めを果たしてきたのか、生涯にわたり深い内省の中にあつたことが伝わってきて胸に迫る」と言う所氏と、「昭和天皇が晩年まで抱えていた尽きせぬ悲しみが伝わる」と言う半藤氏とは結局同じで、天皇としての昭和天皇に真正面から向き合わないのである。正面から向き合っていたら、昭和天皇の字を問題にせざるを得なかったのに、それを語る人は三人の中、一人もいなかった。昭和天皇は統治の天皇だったのだからこそ、彼の資質を論ずることは絶対避けていられない問題なのである。昭和天皇の真筆の問題は片々たる和歌の問題ではなかったのだ。

### 道理で動いた父に学ぶ

以上、私の考える事と三氏の考える事との違い、それがなぜ出て来ているのか。私にはその理

由は分かっている。それは、もう半世紀近くも前に死んだ父に、私が影響を受けたからである。彼は若い頃から「国家は中心より滅ぶ」と言って、誰も手をつけなかった天皇の教育の事を考え続けて実際に行動したから、彼にとつては、天皇が「雲の上の存在」ではなかった。もちろん父は昭和天皇の真筆のことなど知らなかったし、政治の裏を知ろうともしなかったから、全くの新聞知識ぐらいで動いたのだが、「国家は中心より滅ぶ」の信念には揺るぎなく、彼はその信念で道理通りに動いた。すると父には、所氏や半藤氏の持つような付度は出て来なかったのである。ところでその天皇の下、歴史はどう動いたかと言えば、日本は戦争で大敗して国が滅びるところまで行ったのだから、父の心配した通りのが起つたのである。私はそういうことを間近に見たから、何時の間にか自分の生き方として、また主義として、道理を尊ぶのを当然とする人間になつたのである。

戦後になつて私も、隠されていた戦争の内情のことなどを色々知るようになって、私は更に道理の尊重に立つ人間になつた。戦争開始に際して陸軍も海軍も戦争をやりたくなかったとも知つた。山本五十六が、この戦争は最初は勝つても、続くうちには段々形勢が不利になつていくと話していた事も知つた。それならなぜ山本五十六は戦争をする側になつたのか。彼が本当に誠実なら、彼は道理に従わなければならなかったのである。こうして今、私は道理を無視する人を許すことができないようになってゐる。

昭和天皇の真筆に触発されて、私は昭和の歴史をここでもう一度見直してみたくなつた。そう

して一貫して一つの立場に立つて——道理の立場に立つて——考えてみたくなった。もちろん素人の私が、そんなことをきちんと言われるはずはない。しかし私の目から見ても専門家の歴史書には穴があるのだ。ありきたりのことしか言わない。となると矢張り私は自分流にやらなければならぬ。私は専門家の知らないことを知っている積りである。それは昭和の歴史に直接関係することである。専門家は認めないだろうが、それは歴史を変えたかも知れないことである。そして、それで戦争にならなかつたかもしれないと私は思う。

私は今、明らかに衰えたと自覚する己の今の能力を持つてしても、人の言わないことを——誰も知らないことを——語らざるを得ないと思う。私は、昭和天皇の問題を過去のものとして単なる昔話にしてはおけないと思う。単に昭和を懐かしんだり、「今日の繁栄は過去の苦難の上にある」とか言つて済ましては行かない問題だと痛切に思う。こうして私は一年余り、同じ立場で振り返つて考えてみることにしたのである。



## あとがき

私の父は、約百年前に国家は中心より滅ぶとして、天皇の再教育を侍従長鈴木貫太郎（終戦時の首相）に説き、戦時中は判事だったが東条首相に国の滅亡を憂える諫言書を送り、判事懲戒裁判というものにかげられ、終戦時は大審院（現最高裁）の被告だった。

四十年前、世はソ連の北海道侵攻で騒いでいた時、私はソ連の北海道侵攻など無いし、あつても言論で追い払えると朝日新聞の「論壇」に投稿すると、衆議院の委員会は私の発言を不当として欠席裁判にかけた。しかし私と委員会とどちらが正しかったか、いま結果は明らかだろう。その上、投稿掲載では削除されたが、原稿では私はソ連崩壊も「予言」していたのである。

今、核兵器禁止条約で国連は二つに分裂しているが、この問題で一番頼りになるべき国際司法裁判所 ICJ の勧告的意見というのが間違っているのを誰も知らない。ICJ 自身気が付いていない。ICJ は、核兵器が人道法に違反すると言いながら、突如「国家存亡の危機」を持つて来て、その場合には核兵器の使用が合法か違法か、判断出来ないとした。ICJ は、先に禁止兵器とした核兵器を断りなく蘇生させたのである。こういう議論が ICJ の勧告的意見として発表され、世の誰もその不都合を指摘しない。私は、こういうことではいけないと思う。そう主張するのが道理主義で、こうして私は、「道理主義ノススメ」という本を書くかと思つたのである。しかしその切っかけが掴めず、躊躇していたら、昭和天皇の真筆の原稿が新聞に載つて、これを踏

まえて何とか書き始めることになった。

しかしこのグズグズしていたツケは、間もなく現れた。私は、目が急に見えなくなつて参考文献をチェックし辛くなり、更に困つたことには、原稿も書き難くなった。こんな次第で、どうやら「最後」にたどり着いた時は、ホツとしたが、不満足な部分は沢山残る。読者の方々には、読み難いだろうと申し訳ないのだが、お許し頂くのみである。以上の期間中、妹高柳淑子は私が書かなければいけない理由を一番知っていてくれたから、それが書く支えになつたと思う。

最後にひと言。この本には、毛色の変つた小文が一つ付け加えてある。それは、科学に対する私の感謝の気持からである。私は科学に苦勞したけども、この世の中に生まれて何が有難かつたかと言えば、やはり科学を知つたことだろうと思う。立派なものへの敬意を示したかつたとして私的なことを書いたこと、お許し下さい。

出版は、また社会批評社の小西誠氏に引き受けて頂けることになった。小西氏は評論家として多忙の中、草稿にコメントを下さつて、それが非常に適切で苦慮していた修正が進んだ。晩年最後の幸いと、小西さんには敬意を表わすと共に、心からお礼申し上げます。

岡井 敏

二〇二〇年（令和二年）秋

岡井 敏著 (社会批評社刊・本体1800円)

## ●核兵器は禁止に追い込める

——米英密約「原爆は日本人に使う」をバネにして

「ハイドパーク覚書」を知っていますか？

1944年9月18日、ルーズベルト、チャーチル会談による、日本人への「ホロコースト」の合意文書——この恐るべき事実をひた隠しにする、メディアの実態を糺す！

本書は、この米英密約「原爆は日本人に使う」の真相を暴く！そして、原爆が米英の「失敗隠し」に使われたことを論証する。

——二〇二一年発効の「核兵器禁止条約」を活かし、今こそ、核兵器の廃絶へ。

## 著者略歴

---

岡井 敏（おかい びん）

1930 年生まれ。東京大学理学部卒、同大学院修了、理学博士。

1991 年まで科学技術庁無機材質研究所総合研究官、1998 年まで工学院  
大学教授。

著書に『東条弾劾』（現代史出版会、1979 年）、『二つの文化から一つの  
文化へ』（三一書房、1997 年）、『父の「陛下に帝王学なし」と東条弾劾  
私の「九条で国は守れる」』（早稲田出版、2008 年）、『原爆は日本人に  
使っていいな』（同 2010 年）、『核兵器は禁止に追い込める』（社会批評社  
2016 年）

## ●平和憲法だけで国は守れる ——父子苦難の百年

---

2020 年 12 月 8 日 第 1 刷発行

定 価 （本体 1800 円＋税）

著 者 岡井 敏

発行人 小西 誠

装 幀 根津進司

発 行 株式会社 社会批評社

東京都中野区大和町 1-12-10 小西ビル

電話／ 03-3310-0681 FAX／ 03-3310-6561

郵便振替／ 00160-0-161276

U R L <http://www.maroon.dti.ne.jp/shakai/>

E-mail [shakai@mail3.alpha-net.ne.jp](mailto:shakai@mail3.alpha-net.ne.jp)

印 刷 シナノ書籍印刷株式会社